

# シンハラ語における借用語の基礎調査\*

吉田 樹生

shige.mountain.linguistics@gmail.com

キーワード: シンハラ語 言語接触 借用語 品詞 数標示 借用語統合

## 要旨

シンハラ語は、スリランカで話されるインド・ヨーロッパ語族の言語である。本稿は、シンハラ語におけるポルトガル語・オランダ語・英語からの借用語に関しての先行研究での仮説を、辞書のデータを用いて検証するものである。本研究が調査する仮説は二つある。一つは、ポルトガル語・オランダ語からの借用語は名詞に限られ、英語からの借用語には形容詞や動詞もみられるという仮説 (Chandralal 2010) である。もう一つは、ポルトガル語・オランダ語からの借用語は固有語と同様の数標示がされて、英語からの借用語には固有語とは異なる数標示がされるという仮説 (Nitz & Nordhoff 2010) である。調査の結果、前者は支持された。しかし、英語からの借用語にも固有語と同様の数標示がされるものが多く確認されたため、後者は支持されなかった。Nitz & Nordhoff (2010) においては、借用語の数標示方法がポルトガル語・オランダ語由来か英語由来かで異なることを前提として、オランダから英国に植民地宗主国が変わる頃にシンハラ語の言語構造が変化すると議論されていた。しかし、本研究の調査は彼らの前提が成り立たないことを示しているため、それを前提として議論された言語構造の変化も妥当ではない可能性を議論する。

## 1. はじめに

いくつかの言語の話者が接触するとき、言語は別の言語から影響を受けて、語彙、形態論、統語論など様々なレベルで変化する。ある言語 (受容言語; recipient language) が、別の言語 (供給言語; source language) の語を借用語 (loanwords) として取り入れる現象は、言語接触による言語変化の中で最もよくある変化の一つである (Grant 2015)。個別言語の借用語に関しては、多くの記述的研究がなされてきている。本研究はシンハラ語における借用語を調査するものである。

本稿が対象とするシンハラ語はスリランカ民主社会主義共和国 (図 1) の公用語の一つであり、インド・ヨーロッパ語族インド・アーリア語群に属する言語である。シンハラ語の話されるスリランカでは、現在まで様々な言語が話されてきた (Bakker 2006; De Silva 1981)。現在の公

---

\*本稿の草稿に以下の方々から貴重なコメントをいただいた: 鈴木唯、谷川みずき、長屋尚典、林真衣、諸隈夕子 (敬称略)。また本稿の内容の一部は、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所で開催された「第 20 回文法研究ワークショップ: 『言語接触の諸問題 (2)』」および、安田女子大学の宮岸哲也先生が主催されている「シンハラ語母語話者用日本語教育文法研究会」において発表した。研究会では特に、宮岸哲也先生と Dileep Chandralal 先生に本稿の執筆に有益なコメントをいただいた。この場を借りて感謝を申し上げる。

用語ともなっているシンハラ語とドラヴィダ語族のタミル語に加えて、系統不明の先住民言語であるヴェッダ語や、クレオールであるスリランカ・マレー語やスリランカ・ポルトガル語が話されてきた。シンハラ語はそれらの言語と接触し、特にタミル語からは、語彙から統語論に至るまで大きく影響を受けている (Thampoe 2016)。文化的に影響を受けている古典語のサンスクリット語やパーリ語からも語彙的な影響を受けている (Chandralal 2010: 40–41)。さらに、西洋の諸国による植民地支配のため、それらの国々の言語との接触があった。1505 年から 1602 年まではポルトガル、1602 年から 1796 年まではオランダがそれぞれスリランカの沿岸部を支配した。その後 1796 年から 1948 年まで、英国がスリランカ全土を支配していた。この間、シンハラ語は、ポルトガル語、オランダ語、英語などの言語と接触していた。このような言語接触の歴史から、シンハラ語はサンスクリット語・パーリ語などの古典語やタミル語からだけでなく、ポルトガル語、オランダ語、英語からも多くの借用語を取り入れている。



図 1. スリランカの位置 (図中の黒枠部分)

### 1.1. シンハラ語における借用語統合

借用語は音韻論、正書法、形態論、統語論など様々なレベルで受容言語の体系に組み込まれる。この現象は借用語統合 (integration of loanwords) と呼ばれている (Haspelmath 2009: 42; Poplack & Sankoff 1984 など)。借用語の類型論 (Haspelmath 2009; Wichmann & Wohlgemuth 2008; Wohlgemuth 2009; Matras 2020) では、動詞借用語と名詞借用語の統合方法が注目されている。動詞借用語の類型論においては、形態統語的統合には、軽動詞の使用 (light verb strategy)、受容言語の動詞化接辞などを伴って借用される間接的挿入 (indirect insertion)、受容言語の屈折接辞

を直接にとって借用される直接挿入 (direct insertion)、供給言語の屈折パラダイムをそのまま借用するパラダイム転移 (paradigm transfer) の四つの分類がなされている (Wichmann & Wohlgenuth 2008: 92)。一方、名詞借用語の形態統語的統合については、Matras (2020: 188) が以下のように四つの分類を提示している。

- (1) 名詞借用語の形態統語的統合方法 (Matras 2020: 188)
  - a. 名詞借用語を固有語と同様に扱い、固有の屈折パターンに統合する (To treat borrowed nouns just like native nouns, and integrate them into native inflection patterns)
  - b. 統合することを避け、借用した名詞の簡略化した表現を使用する (To avoid integration and maintain just a simplified representation of borrowed nouns)
  - c. 供給言語の屈折とともに名詞を統合する (To integrate nouns along with their original inflection in the source language)
  - d. 名詞借用語を借用語として区別できる特別な統合方法を用いる (To apply a special integration strategy that marks out borrowed nouns as loans)

これらのうち、(1a) は動詞借用語の直接挿入に対応し、(1c) は動詞借用語のパラダイム転移に対応している。以下では、シンハラ語における借用語の形態統語論的統合方法を示す。

### 1.1.1. 動詞の借用語統合

シンハラ語の動詞借用語は軽動詞によってのみ形態統語論的に統合される。軽動詞とは、供給言語の語とともに複合語を形成するもので、シンハラ語においては *kəṛənəwa* ‘do’ と *wenəwa* ‘become’ が用いられる。主に、*kəṛənəwa* との複合語は他動詞、*wenəwa* との複合語は自動詞になる。シンハラ語の代表的な参照文法である Chandralal (2010: 41–42) は、英語からの動詞の借用語として (2) の例を挙げている。

- (2) 英語から借用された動詞 (Chandralal 2010: 42)
  - a. *kaṭ* *kəṛənəwa*  
cut do  
‘to cut’
  - b. *ṭrai* *kəṛənəwa*  
try do  
‘to try’
  - c. *paas* *wenəwa*  
pass become  
‘to pass’

- d. *aut wenəwa*  
out become  
'to be out'

複合動詞において供給言語から借用されている前部要素が明らかに動詞ではない場合 (e.g., *aut* 'out') もあるが、本稿においては Matras (2020) の分類にしたがって *kəranəwa* や *wenəwa* と別の言語の語の複合語を動詞借用語として扱う。Matras (2020: 198) は、動詞の果たす二つの機能として、事象や状態などを表す語彙的なラベルとしての機能と、述語としてはたらく文法的な機能を挙げている。シンハラ語のように固有語の軽動詞で複合動詞の自他を示している場合には、借用語が単に語彙的なラベルであり、文法的役割の標示は固有語の軽動詞が担っているとされる。このような場合にも、Matras (2020) によれば動詞借用語であると分析できる。以下、本稿では (2) のような複合動詞を動詞借用語とする。

### 1.1.2. 名詞の借用語統合

この節では、シンハラ語における無生名詞の借用語統合方法を議論する。その議論の前提として、まずシンハラ語の固有語の数標示を以下にまとめる。固有語では、語幹が複数形であり接辞を付されたものが単数形であるという数標示がなされる。シンハラ語の固有語の例は、(3) に示してある。

#### (3) 固有語 *puʈu* 「椅子」<sup>1</sup>

- a. *puʈu-wə*  
chair-SG  
'the chair'
- b. *puʈu*  
chair.PL  
'(the) chairs'

(3) では語幹が *puʈu* であり、単数形では接辞 *-wə* が付されている。この数標示はほとんどの無生名詞に適用される。その他の例としては *naasə-yə* 'the nose', *naasə* '(the) noses', *pot-ə* 'the book', *pot* '(the) books' のような語がある<sup>2</sup>。これらの例からわかるように、単数形の接辞には *-yə*, *-wə*, *-ə* などの異形態があり、語幹末の分節音に条件づけられている (Nitz & Nordhoff 2010)。

<sup>1</sup>本稿で使用する略号は以下のとおり: SG = singular, PL = plural

<sup>2</sup>シンハラ語の名詞では、複数の場合には定性が形態論的に区別されないが、単数の場合には形態論的に定と不定が区別される。接尾辞 *-ak* や *-ek* によって名詞句が不定であることが表される (e.g., *naasə-yə* 'the nose' vs. *naasə-y-ek* 'a nose')。これは以下に見る *ekə* を伴う数標示においても同様である。

名詞借用語の形態統語論的統合には、無生名詞において三つのパターンがある。一つ目は固有語と同じ数標示がされるものである。これは (1) に示した Matras (2020) の分類における (1a) に対応している。その例を (4) に示している。

(4) ポルトガル語 *sapato* 「靴」 からの借用語

a. *sapattu-wə*

shoe-SG

‘the shoe’

b. *sapattu* (<*sapato*)

shoe.PL

‘(the) shoes’

(4) においては、ポルトガル語において単数形である *sapato* がシンハラ語の複数形として借用され、単数形には単数接辞の *-wə* が付されている。このように語幹が複数形であり接辞を付されたものが単数形であるという数標示は、シンハラ語の固有語での数標示と同様である。以上のことから、単数形に *-yə, -wə, -ə* がつく借用語名詞は、固有語と同様の数標示がなされていると言える。

名詞借用語の形態統語論的統合の二つ目のタイプは、(5) のように単数形が *ekə* を伴う数標示である。この方法は借用語のみで観察されるため、(1) に示した Matras (2020) の分類における (1d) に対応している。

(5) 英語 *bus* 「バス」 からの借用語

a. *bas ekə*

bus SG

‘the bus’

b. *bas* (<*bus*)

bus

‘(the)buses’

シンハラ語の数詞修飾では、*ekə* ‘one’ 以外の数詞は被修飾名詞に後続するが、*ekə* ‘one’ は被修飾名詞に先行するため、(5a) のような語順にはならない。例えば、(4) の *puṭuwə* を *dekə* ‘two’ が修飾するときには *puṭu dek-ak*<sup>3</sup> ‘two chairs’ となる。しかし一つの椅子を表すときには、*puṭuwə ekə* や *puṭuw-ak ekə* とはならず、*puṭuwə* ‘the one chair’ や *ekə puṭuw-ak* ‘(a) one chair’ となる (Chandralal 2010: 62)。数詞の修飾語順は、固有語と同様の数標示がなされる借用語でも同様で

<sup>3</sup>-ak や -ek は不定の接辞である。これらも *ekə* に由来するが、借用語の単数標示の *ekə* は定を表すため、定性に関してふるまいが異なる。

ある (Chandralal personal communication)。そのため、(5a) は *ekə* ‘one’ が *bas* ‘bus’ を修飾している構造とは考えられない。

最後に、一般的な分類を示す固有語と供給言語の語による複合語を形成して、名詞を借用する統合方法もある。具体的には、果物や花の種類を表す名詞を *gediyə* ‘the fruit’ や *malə* ‘the flower’ との複合によって統合するものである。これは (1) に示した Matras (2020) の分類における (1a) に対応していると考えられる。(6) がその例である。

(6) 複合語を形成することで数を標示する名詞

- a. *roosə mal-ə*  
rose flower-SG  
‘the rose flower’
- b. *roosə mal*  
rose flower.PL  
‘(the) rose flowers’

(6) では、英語の *rose* から借用された *roosə* がシンハラ語の固有語 *malə* ‘the flower’ と複合語をなしていて、*malə* の単複の標示によって (6) では名詞句の数が標示されている。このタイプは、複合語の後部要素だけを見れば固有語と同様の数標示だと考えられるが、借用された名詞自体は固有語と同様の数標示をされていないため、(4) とは別のタイプとして分類する。

## 1.2. シンハラ語の借用語に関する仮説

シンハラ語の借用語に関して、先行研究では以下の二つの仮説が提示されている。まず Chandralal (2010: 41–42) はシンハラ語の語彙における借用語を概観し、(7) の仮説を自身の観察に基づいて提示している。

(7) 供給言語と品詞の対応仮説 (Chandralal 2010)

ポルトガル語とオランダ語からの借用語は名詞に限られ、ほとんどが具体的な物体を指す。[...] 口語シンハラ語は、動詞でさえも、様々な分野の英語の単語を自由に取り入れる。

These loan words from Portuguese and Dutch are limited to nouns, mostly representing concrete objects. [...] Colloquial Sinhala freely accommodates English words, even verbs, related to varied fields including life style, office environment and educational and entertainment fields (Chandralal 2010: 42).

また、名詞借用語における数標示方法に関しては、供給言語と数標示方法が対応することが提案されている (Nitz & Nordhoff 2010)。Nitz & Nordhoff (2010) は、(8) の仮説を提示している。

(8) 供給言語と数標示方法の対応仮説 (Nitz & Nordhoff 2010: 256–258)<sup>4</sup>

ポルトガル語・オランダ語からの借用語では (4) のように固有語と同様の数標示方法がとられる一方で、英語からの借用語では (5) のように固有語とは異なる数標示方法がとられる。

これを前提に彼らは、シンハラ語数標示システムの歴史的変化に関する議論 (4.3 節) をしている。具体的には、*eka* を伴う数標示は英語にのみみられると述べ、歴史的には英国がスリランカを支配し始めた 19 世紀初頭に現れた数標示方法であると議論している。

### 1.3. 本論文の目的

本研究は、上記二つの先行研究で述べられている仮説 (7), (8) を、辞書に記載されたシンハラ語の借用語をデータとして検証する。供給言語と品詞の対応関係 (Chandralal 2010) や供給言語と数標示方法の対応関係 (Nitz & Nordhoff 2010) については、上に挙げた先行研究のような質的な観察にとどまっており、実際にどれほどそれらの対応関係が成立しているのかは明らかではない。本稿では、これら二つの対応関係について量的な調査を行うことで、シンハラ語の借用語に関して従来述べられてきた仮説を検証する。

本稿の構成は以下のとおりである。まず第 2 節では、辞書を用いた本研究の調査方法を述べる。次に第 3 節では、辞書を調査した結果を示す。そして第 4 節では、供給言語と品詞の対応関係は確認されたものの、供給言語と数標示方法の対応関係は確認できなかったことを議論する。さらにこれらの発見によるいくつかの含意を議論する。最後に第 5 節で本稿をまとめる。

## 2. データと調査方法

本研究では、先行研究で借用語に関して述べられていることを検証するために、辞書に記載されている借用語の供給言語と品詞を調査した。また名詞については数標示方法も調査した。本節では使用したデータと調査方法について述べる。

### 2.1. 使用したデータ

調査に使用した辞書は “*A Sinhalese-English Dictionary*” (Carter 1924) である。この辞書はシカゴ大学の Digital Dictionaries of South Asia (<https://dsal.uchicago.edu/dictionaries/carter/>) のウェブサイトからアクセスすることができる。本研究ではこのウェブサイトから、HTML ファイルを収集し、一つのテキストファイルにまとめたものをデータとして使用した。作成されたテキストファイルでは、一行に一つの見出し語が記載されている。

この辞書では、見出し語 (56,850 語) はシンハラ語の単語であり、品詞と英訳に加えて、単

<sup>4</sup>彼らの議論では、(6) のように複合語を形成するものは言及されていない。



語によってはいくつかの追加の情報が記載されている。追加の情報のうち今回の調査に関わるものには、複数形の語形と、借用語である場合に書かれている供給言語の情報がある。(9) は  $\text{ṁṁṁṁ}$  (mēsaya) ‘table’ という単語が辞書にどのように記載されているのかを示したものである。

(9)  $\text{ṁṁṁṁ}$ ,  $\text{ṁṁṁṁ}$ , *n. Port.*, table.

まず、 $\text{ṁṁṁṁ}$  (mēsē) という異形態とともに見出し語の  $\text{ṁṁṁṁ}$  (mēsaya) が記載されている。そして、どの単語にも必ず記載される品詞情報 *n.* (名詞) と意味がつづく。それらに加えて、借用語であるこの単語には、*Port.* (Portuguese; ポルトガル語) という供給言語の情報がある。

## 2.2. 調査方法

この辞書から借用語を取り出すために、(9) の *Port.* のような供給言語の情報を利用した。借用語であるものに限定するために、辞書のデータをまとめたテキストファイルから、*Port.* (Portuguese;ポルトガル語)、*D.* (Dutch; オランダ語)、*Eng.* (English; 英語) との記載がある行を全て取り出した。他にこの辞書に借用語として示されているものには、ベンガル語・タミル語・サンスクリット語・パーリ語からの借用もあった。ポルトガル語・オランダ語・英語の借用語のみを本稿で扱うのには二つの理由がある。まず、植民地宗主国の言語という点で共通している言語を比較するためである。また、先行研究である Nitz & Nordhoff (2010) の数標示に関する議論がこれらの言語からの借用語に基づいていたことも理由の一つである。

このようにして抜き出された借用語に対して、供給言語、品詞、数標示方法をまとめた。まず供給言語は、(9) に示したように借用語に必ず記載される略号によって判断した。抜き出された単語には、“*Port.*”, “*D.*”, “*Eng.*” のいずれかが書かれているので、これら三つのうちいずれかの言語からの借用語として分類することができた。次に品詞は、各見出し語に記載されている品詞の情報に基づいて判断した。ここで活用した品詞情報は、*n.* (名詞)、*v.* (動詞)、*a.* (形容詞) の三つである。今回抜き出された借用語は全て、この三つの品詞のいずれかに分類された。

最後に、それぞれの名詞借用語に関して数標示の方法をまとめた。数標示方法は、固有語と同様に接辞による数標示、*ekə* による数標示、複合語による数標示の三つに分類した。これらは 1.1.2 節で名詞借用語の統合方法として導入したものであり、それぞれ (4) の *sapattu-wə* ‘the shoe’、(5) の *bas ekə* ‘the bus’、(6) の *roosə malə* ‘the rose flower’ が含まれる。

辞書に複数形が記載されている場合にはその情報を利用した。(10) は複数形が記載されている場合の例である。

(10)  $\text{ṁṁṁṁ}$ , *n. Port.*, a pound in weight; *pl.*  $\text{ṁṁṁṁ}$ .

$\text{ṁṁṁṁ}$  (röttala) という単語の場合は、品詞情報・供給言語・意味に加えて、*pl.*  $\text{ṁṁṁṁ}$  として複



数形が *රත්තල්* (röttal) であることが記載されている。このような場合、単数形末尾の母音の有無で単複が標示されているので、固有語と同様の数標示であると判断できる。複数形の記載がない場合には、著者の知識または母語話者に確認することによって数標示方法を判断した。

以上の手順で注釈した供給言語、品詞、数標示方法をもとに、(7) の「供給言語と品詞の対応仮説」と (8) の「供給言語と数標示方法の対応仮説」の二つの仮説を調査した。次節ではその結果を示す。

### 3. 結果

前節で述べた方法によって全部で 250 語の借用語が収集された。以下では、供給言語と品詞の関係 (3.1 節) と供給言語と数標示方法の関係 (3.2 節) をそれぞれ示す。

#### 3.1. 供給言語と品詞の関係

調査の結果、表 1 と図 2 のように供給言語と借用語の品詞の関係が確認できた。表 1 では、各行が供給言語、各列が借用語の品詞を表している。数字は当該の条件に当てはまる語がいくつ存在したかを示していて、カッコ内には各供給言語についてそれぞれの品詞が占める割合が示されている。表 1 を図示したものが図 2 である。例えば表 1 からは、Carter (1924) にはポルトガル語由来で名詞である借用語が 115 語記載されていたことがわかり、ポルトガル語由来の借用語に占める名詞の割合は 98.3% であることがわかる。表 1 から、供給言語と借用語の品詞の関係として、ポルトガル語・オランダ語由来の借用語では名詞がほとんどであり、英語由来の借用語では名詞以外の借用語も比較的多いことが読み取れる。

表 1. 供給言語と借用語の品詞の関係<sup>5</sup>

供給言語	名詞	動詞	形容詞	合計
ポルトガル語	115 (98.3%)	1 (0.9%)	1 (0.9%)	117
オランダ語	51 (100.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	51
英語	65 (79.3%)	2 (2.4%)	15 (18.3%)	82
合計	231 (92.4%)	3 (1.2%)	16 (6.4%)	250

<sup>5</sup>(2) にあげた英語からの借用動詞が 4 つの借用動詞は Carter (1924) には記載されておらず、この辞書に英語からの借用語が網羅されているとはいえない。これは英語からの借用語はインフォーマルなレジスターでの使用に限定的である Chandralal (2010: 42) ため、今回調査した辞書には英語由来の借用語の掲載数が少なかったことが理由として考えられる。しかし、それでもなお動詞や形容詞の借用語の割合が他の供給言語と比較して多いことは、英語とそれ以外の言語の間に借用語の品詞の傾向に違いがあることを示唆している。

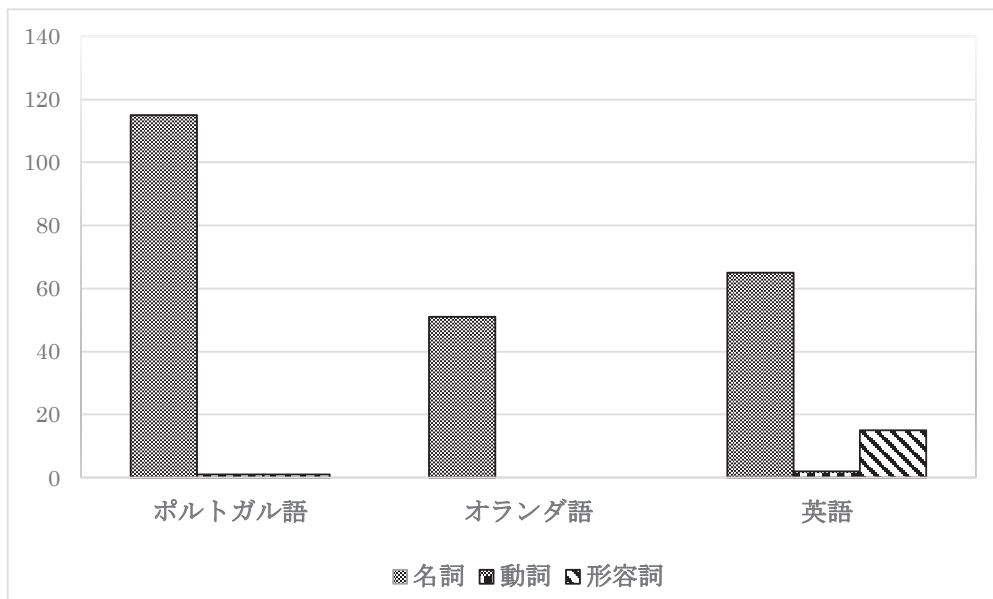


図 2. 供給言語と借用語の品詞の関係

それぞれの言語からの借用語に確認された動詞と形容詞の例は表 2、表 3 に例示している。表 2 にみられるように、動詞の借用語はすべて軽動詞 *kəranəwa* ‘do’ によって統合されていた。また表 3 にみられるように、形容詞の借用語はシンハラ語の接辞や語を伴わず直接統合されているものもあった。

表 2. 動詞の借用語

供給言語	意味	借用語の語形
ポルトガル語	「召喚する」	<i>sitaasi kəranəwa</i>
英語	「修理する」	<i>repəreeru kəranəwa</i>

表 3. 形容詞の借用語

供給言語	意味	借用語の語形
ポルトガル語	「ポルトガルの」	<i>pratikaal</i>
英語	「アジアの」	<i>aasiyaatikə</i> <sup>6</sup>
英語	「民間の」	<i>siwil</i>

名詞の借用語については、3.2 節で具体例を示す。

<sup>6</sup>Hettiaratchi (1965) は *aasiyaatikə* をポルトガル語の *asiatica* ‘asian’ の借用であるとしている。本調査での供給言語の判断は Carter (1924) に依拠するものの、より正確な供給言語の同定のためには詳細な調査が必要である。

### 3.2. 供給言語と数標示の方法

表 4 と図 3 のように、供給言語と三つの数標示方法は必ずしも一対一に対応していないことがわかった。表 4 では、各行が供給言語、各列が数標示の方法を表している。数字は当該の条件に当てはまる語がいくつ存在したかを示していて、カッコ内には各供給言語についてそれぞれの数標示方法が占める割合が示されている。またこの表を図示したものが図 3 である。これらの図表から、供給言語によらず単数接辞によって統合する借用語が多いことがわかる。加えて、*ekə* によって統合する借用語は英語由来で多いものの、ポルトガル語由来のものにもみられることも読み取れる。このことから、特定の供給言語からの借用語がすべて特定の統合方法で統合されているわけではないといえる。そのため、供給言語と数標示方法は対応しない。

表 4. 供給言語と数標示方法の対応

供給言語	単数接辞	<i>ekə</i>	複合語	合計
ポルトガル語	112 (97.4%)	2 (1.7%)	1 (0.9%)	115
オランダ語	48 (94.1%)	0 (0.0%)	3 (5.9%)	51
英語	54 (83.1%)	8 (12.3%)	3 (4.6%)	65
合計	214 (92.6%)	10 (4.3%)	7 (3.0%)	231

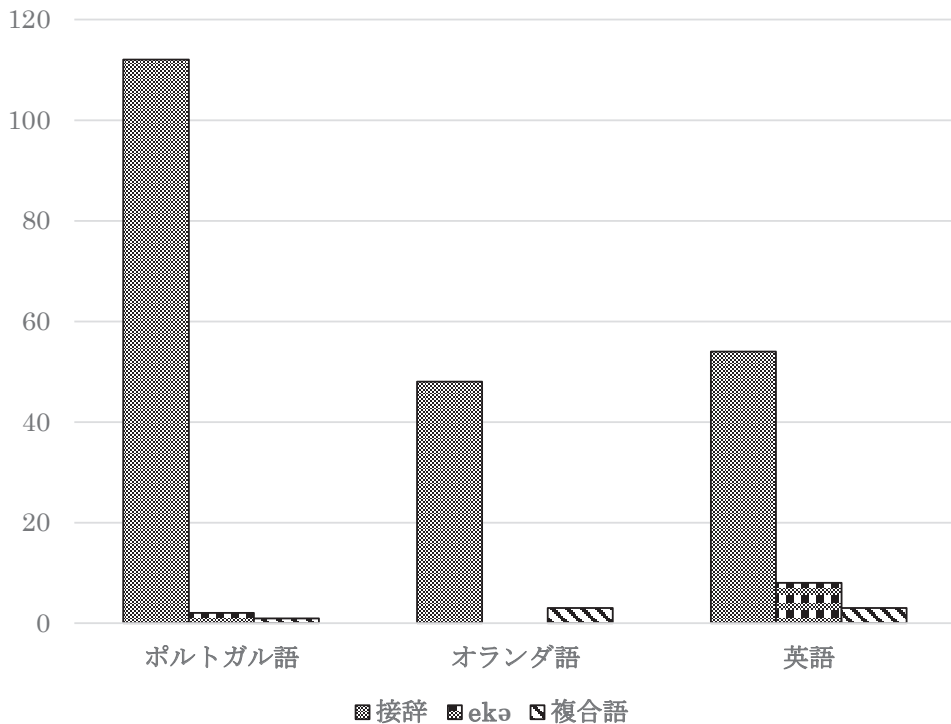


図 3. 供給言語と数標示方法の対応

それぞれの言語からの借用語に見られた各数標示方法は表 5、表 6 に例示している。表 5 に示した様に固有語と同様の数標示がなされる場合、供給言語によらず、単数形の接辞は語幹末の音韻的条件に応じて異形態をとる。表 6 でとりわけ重要なのは、ポルトガル語由来でも *ekə* が使われている点である。*mees* はポルトガル語 *meias* からの借用であり (Hettiaratchi 1965; Sannasgala 1976)、Chandralal (personal communication) によると *mees* の単数標示は *ekə* によるもの以外はない (e.g., \**mees-ə*)。

表 5. 固有語と同様の数標示方法

供給言語	意味	単数形	複数形
ポルトガル語	「靴」	<i>sapattu-wə</i>	<i>sapattu</i>
	「扇風機」	<i>awaana-yə</i>	<i>awaana</i>
	「居酒屋、酒場」	<i>tæwæærum-ə</i>	<i>tæwæærum</i>
オランダ語	「オフィス」	<i>kantooru-wə</i>	<i>kantooru</i>
	「スコップ」	<i>iskoppə-yə</i>	<i>iskoppə</i>
英語	「銀行」	<i>bæŋku-wə</i>	<i>bæŋku</i>
	「爆弾」	<i>bombə-yə</i>	<i>bombə</i>
	「鉛筆」	<i>pensəl-ə</i>	<i>pensəl</i>

表 6. *ekə* による数標示方法

供給言語	意味	単数形	複数形
ポルトガル語	「手袋」	<i>at mees ekə</i>	<i>at mees</i>
英語	「ルード (単位)」	<i>ruud ekə</i>	<i>ruud</i>

#### 4. 議論

この節では、まず仮説 (7), (8) を前節で示した本研究の調査結果に照らして検討する (それぞれ 4.1 節, 4.2 節)。さらに 4.2 節では、*ekə* による数標示が生じた要因として Nitz & Nordhoff (2010) が主張する言語構造の変化が妥当ではない可能性を指摘し、その他の要因も検討していく必要があることを提案する。

##### 4.1. 供給言語と品詞の対応関係

Chandralal (2010) はポルトガル語・オランダ語からの借用語は名詞に限られ、英語からの借用語には動詞も存在するという供給言語と借用語の品詞の対応関係を指摘している。表 1 と図 2 に示した本研究の調査結果は、この指摘を概ね支持する結果となった。ポルトガル語とオランダ語からの借用語では名詞が占める割合がそれぞれ 98.3% と 100.0% であったのに対して、英語からの借用語では名詞は 79.3% であり、名詞の占める割合が異なっていた。英語からの借用語には、動詞が 2.4%、形容詞が 18.3% 含まれていた。このように、ポルトガル語・オ

ランダ語と英語からの借用語では、品詞の割合が異なっていた。

供給言語によって借用語の品詞の割合は異なるものの、名詞の借用語が多いという全体的な傾向は通言語的によくあるものである。41 言語の借用語を調査した Haspelmath & Tadmor (2009) は、各言語の名詞全体に占める借用語の割合が、他の品詞の場合よりも高いという傾向を報告している。彼らは、名詞では平均で 31.2% が借用語であるのに対して、形容詞と副詞では 15.2%、動詞では 14.0% が借用語であることを示している。さらに、個別言語の借用語の中で名詞が最も多いということも、多くの言語の借用語について報告されている。例えば、アメリカ大陸のケチュア語・オトミ語・グアラニ語におけるスペイン語からの借用語を調査した Bakker, Gómez Rendón & Hekking (2008) では、動詞や形容詞、接続詞などの借用語の割合は三つの言語で異なるものの、全ての言語において名詞の借用語が最も多いことを報告している。シンハラ語の借用語の品詞も、このような類型論的データや他言語の記述と同様の傾向を示している。

#### 4.2. 供給言語と数標示方法の対応関係

Nitz & Nordhoff (2010) は、ポルトガル語・オランダ語からと英語からの借用語で数標示方法が異なることを指摘している。しかし、本研究で調査した Carter (1924) に記載の借用語については、供給言語と数標示の方法の間には明確な対応は確認できなかった。数標示方法の分布に関して、3.2 節で示したように英語由来の借用語にも単数形に接辞 *-ə* やその異形態を付ける固有語と同様の数標示が見られる。またポルトガル語由来の借用語にも *eka* による数標示がありうる。このように Nitz & Nordhoff (2010) が前提としていたような供給言語による数標示方法の離散的な違いはないことが確認された。

このことから、供給言語と数標示方法の対応関係を前提として Nitz & Nordhoff (2010) が議論したシンハラ語の数標示システムの変化は、妥当ではない可能性が示唆される。Nitz & Nordhoff (2010) は、ポルトガル語・オランダ語からの借用語と英語からの借用語では数標示方法が変化していることを前提として、英語との接触が始まる頃にシンハラ語の言語構造が変化したと論じている。彼らの説明では、ポルトガルやオランダが統治していた時代までは、語幹が複数を表し単数接辞が単数形を派生するために使われるというシステムであったとされる。このシステムは、単数接辞を語幹に付加すると分析されている点で、加法的 (additive) 単数システムであるとされている (Nitz & Nordhoff 2010: 257)。一方で、英語からの借用語では単数接辞 *-ə* を付加することがほとんどないことを前提として、英国が統治し始めた頃には、単数接辞 *-ə* が単数の意味を表すと分析されなくなったと彼らは主張している。この段階では、単数形の末尾の母音を削除して複数形を派生するという、減法的 (subtractive) 複数システムに再分析されたと議論されている (Nitz & Nordhoff 2010: 258)。以上のように彼らが、シンハラ語の数システムが加法的単数システムから減法的複数システムへと変化したと分析するのには、ポルトガル語・オランダ語からの借用語と英語からの借用語で数標示方法が異なるという仮説 (8) が前提にある。

しかし、4.2 節で論じたように供給言語と数標示方法が一对一には対応していない、つまり仮説 (8) が成り立たないことから、Nitz & Nordhoff (2010) が主張したように 19 世紀初頭のイギリスの支配が始まった頃に言語構造が再分析されたと考えることは難しい。彼らの分析によると、それまで付加される単数接辞として話者に分析されていた単数形末尾の *-ya*, *-wa*, *-ə* が、複数形を派生するために削除される要素として再分析されるようになったという。これらの接辞が削除される要素であるならば、新たに借用された英語の単語の単数を標示するために *-ya*, *-wa*, *-ə* が付加されることはない、と彼らは説明する。しかし実際には、19 世紀以降に借用されたであろう多くの英語由来借用語で固有語と同様、単数形に *-ya*, *-wa*, *-ə* を付加するものが存在していた。この事実は、単数形の *-ya*, *-wa*, *-ə* が削除される要素として再分析されたという Nitz & Nordhoff (2010) の分析では説明がつかない。そのような再分析があったとすれば、新たに借用された語にはこれらの接辞がつかはずはないからだ。今回調査した単語の数は少ないものの、英語由来借用語にも単数形で接辞を付与するものが存在していることは明らかであり、シンハラ語の数標示が減法的複数システムとして再分析されたとするのは妥当ではないだろう。

*eka* を用いる借用語に特有の数標示方法があることが、シンハラ語の言語構造の変化によっては説明できないのであれば、言語内的要因以外の可能性を検討していく必要がある。考えられる別の要因としては、言語接触状況の違いや借用語の頻度などがある。借用語の研究においては、言語接触の程度と動詞の借用方法が関連していること (Wichmann & Wohlgemuth 2008) や、借用語の頻度と動詞の借用方法が関連していること (Wohlgemuth 2009) が指摘されている<sup>7</sup>。今後の研究ではシンハラ語の名詞の借用方法に関して、言語接触の程度や頻度という要因をより具体的に調べていく必要があるだろう。

## 5. まとめ

本稿では、シンハラ語の借用語に関する先行研究での観察を、辞書のデータを用いて検証した。本研究で検討した先行研究の仮説は次の二つである。一つは、ポルトガル語とオランダ語からの借用語は名詞に限られ、英語からの借用語には動詞なども存在するという、供給言語と品詞の対応仮説 (Chandralal 2010) である。もう一つは、ポルトガル語とオランダ語から借用された名詞は固有語と同様の数標示がなされ、英語から借用された名詞は異なる標示方法がとられるという、供給言語と数標示方法の対応仮説 (Nitz & Nordhoff 2010) である。

本稿の調査の結果、前者は支持されたものの、後者を支持する結果は得られなかった。ポルトガル語とオランダ語からの借用語では名詞がほとんどであった一方で、英語からの借用語には動詞や形容詞も含まれていた。これは Chandralal (2010) の仮説と合致している。しかし、名詞の数標示方法に関しては、英語からの借用語とそれ以前の借用語の間に明確な違いが確認で

<sup>7</sup>動詞の借用語統合と名詞の借用語統合において、同じ要因が統合方法に影響しているのかは興味深い問いである。形式的にはシンハラ語では、動詞の借用語では必ず軽動詞が必要であるのに対して、名詞の借用語では直接屈折接辞を付す場合と *eka* を伴い借用する場合があるという非対称性がある。名詞にのみ二つの統合方法があるという非対称性はカナシ語などでも報告されている (Saxena, Borin & Comrie 2022)。動詞借用語だけでなく、名詞借用語に統合方法が複数ある場合の要因についても、類型論的にも研究していく必要がある。

きなかった。これは Nitz & Nordhoff (2010) の仮説に反するものである。

これらの調査結果に基づいて、借用語の品詞と数標示方法に関して次のことを議論した。品詞に関しては、Chandralal (2010) が指摘しているように供給言語によって借用語の品詞は異なる傾向があるものの、全体として名詞が多く借用されていることは他言語の記述や類型論的データとも合致する結果であることを論じた。また、名詞の数標示方法に関する結果が Nitz & Nordhoff (2010) の観察とは異なっていたことから、彼らが数標示方法の違いを前提に主張する言語構造の変化が妥当ではない可能性を議論した。さらに、借用語にのみみられる数標示方法の要因として、言語接触の程度の違いや借用語の頻度が考えられることを提示し、将来の研究の方向性を示した。将来的には、言語政策やそれに伴う言語態度の変容に関する社会言語学的研究や、コーパス調査などによる借用語の頻度の研究を進めていく必要がある。

### 参考文献

- Bakker, Dik, Jorge Gómez Rendón & Ewald Hekking. 2008. Spanish meets Guaraní, Otomí and Quichua: A multilingual confrontation. In Thomas Stolz, Dik Bakker & Rosa Salas Palomo (eds.), *Aspects of language contact: New theoretical, methodological and empirical findings with special focus on romancisation processes*, 89–121. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Bakker, Peter. 2006. The Sri Lanka *Sprachbund*: The newcomers Portuguese and Malay. In Yaron Matras, April McMahon & Nigel Vincent (eds.), *Linguistic Areas*, 135–159. London: Palgrave Macmillan.
- Carter, Charles. 1924. *A Sinhalese-English dictionary*. Colombo: Baptist Missionary Society.
- Chandralal, Dileep. 2010. *Sinhala*. Amsterdam: John Benjamins.
- De Silva, Kingsley M. 1981. *A history of Sri Lanka*. London: C. Hurst & Company.
- Field, Fredric W. 2002. *Linguistic borrowing in bilingual contexts*. Amsterdam: John Benjamins.
- Grant, Anthony P. 2015. Lexical Borrowing. In John R. Taylor (ed.), *Oxford handbook of the word*, 431–444. Oxford: Oxford University Press.
- Haspelmath, Martin. 2009. Lexical borrowing: Concepts and issues. In Martin Haspelmath & Uri Tadmor (eds.), *Loanwords in the world's languages: A comparative handbook*, 35–54. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Haspelmath, Martin & Uri Tadmor. 2009. *Loanwords in the world's languages: A comparative handbook*. Berlin: Mouton de Gruyter
- Hettiaratchi, D. E. 1965. Influence of Portuguese on the Sinhalese language. *The Journal of the Ceylon Branch of the Royal Asiatic Society* 9(2). 229–238.
- Matras, Yaron. 2020. *Language contact*. 2nd edn. Cambridge: Cambridge University Press.
- Nitz, Eike & Sebastian Nordhoff. 2010. Subtractive plural morphology in Sinhala. In Jan Wohlgemuth & Michael Cysouw (eds.), *Rara & rarissima: Documenting the fringes of linguistic diversity*, 247–266. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Nordhoff, Sebastian. 2012. Establishing and dating Sinhala influence in Sri Lanka Malay. *Journal of*



*Language Contact* 5(1). 23–57.

- Poplack, Shana & David Sankoff. 1984. Borrowing: The synchrony of integration. *Linguistics* 22(1). 99–136.
- Sannasgala, Puñci Baṇḍāra. 1976. *A Study of Sinhala vocables of Dutch origin: With appendices of Portuguese and Malay/Javanese borrowings*. Colombo: The Netherlands Alumni Association of Sri Lanka.
- Saxena, Anju, Lars Borin & Bernard Comrie. 2022. Kanashi prehistory 2: Verb loans. In Anju Saxena & Lars Borin (eds.), *Synchronic and Diachronic Aspects of Kanashi*. Berlin/Boston: Mouton de Gruyter.
- Thampoe, Harold Dharmasenan. 2016. *Sinhala and Tamil: A case of contact-induced restructuring*. Newcastle: Newcastle University PhD Thesis.
- Wichmann, Søren & Jan Wohlgemuth. 2008. Loan verbs in a typological perspective. In Thomas Stolz, Dik Bakker & Rosa Salas Palomo (eds.), *Aspects of language contact: New theoretical, methodological and empirical findings with special focus on romancisation processes*, 89–121. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Wohlgemuth, Jan. 2009. *A typology of verbal borrowings*. Berlin: Mouton de Gruyter.

# A Preliminary Investigation of Loanwords in Sinhala

Shigeki Yoshida

shige.mountain.linguistics@gmail.com

**Keywords:** Sinhala, language contact, loanwords, word classes, number marking, integration of loanwords

## Abstract

Sinhala is an Indo-European language spoken in Sri Lanka. In Sinhala, many loanwords are borrowed from Portuguese, Dutch, or English, which are the languages of the colonizers. This study investigates two hypotheses made in the literature on Sinhala loanwords. The first is a correlation between the source language of a loanword and the parts of speech: loanwords from Portuguese and Dutch are only nouns, while loanwords from English include adjectives and verbs as well as nouns. The second hypothesis examined is a correlation between the source language and the morphosyntactic process of number marking: the singular form of loanwords from Portuguese and Dutch is marked by the same suffix used with native words, while the singular form of loanwords from English is marked by a different process. Using data extracted from a dictionary, this study quantitatively examines these two hypotheses. The discussion of this study contributes to the description of loanwords and the analysis of number marking in Sinhala.

(よしだ・しげき 東京大学大学院)